

令和6年度  
東京の林業振興に向けた専門懇談会  
(第3回)  
議 事 録

令和7年2月13日(木)

都庁第一本庁舎33階特別会議室N3

## 東京の林業振興に向けた専門懇談会議事録

日時：令和7年2月13日 午後2時00分から午後3時58分

場所：都庁第一本庁舎33階 特別会議室N3

《 開 会 》

【司会（榎園部長）】 ただいまから令和6年度東京の林業振興に向けた専門懇談会第3回を開催いたします。

本日は、ご多忙の中ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

議事に入るまでの間、私、産業労働局農林水産部長の榎園が進行役を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

本日の説明資料につきましては、会場におきましては、前方のモニターまたはお手元の資料のほうでご覧いただくようになってございます。

本日は5名全ての委員の皆様にご出席をいただいております。

《 局長挨拶 》

【司会】 それでは、開会に当たりまして、産業労働局長の田中からご挨拶を申し上げます。

【田中局長】 後ろから失礼いたします。産業労働局長の田中でございます。

委員の皆様におかれましては、ご多忙の中、今年度3回目になりました東京の林業振興に向けた専門懇談会にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

この間、第1回、第2回という形でいただいたご意見を参考にいたしまして、7年度予算では、新規施策や拡充施策を検討してまいりまして、財政当局にも説明して何とか認められたというのが今回できております。

7年度予算では、川上では、伐期を迎えた人工林の伐採をさらに加速していこうという話。あと、川中では多摩産材の流通の円滑化による取引を増加させていこうと。川下では、さらなる需要創出に資する取組を行うことを主眼として編成してございます。そういう川上、川中、川下という形で、一連の動きの中でより一層の森林循環を実現していこうとい

うことで今回編成いたしました。

委員の皆様方におかれましては、林業振興のため忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。開会の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願い申し上げます。

【司会】 それでは、これからの議事進行につきましては酒井座長にお願いしたく存じます。

よろしくお願い申し上げます。

【座長（酒井委員）】 酒井でございます。本懇談会が滞りなく円滑に進みますよう、ぜひご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

## 《 議 事 》

懇談会でのご意見を踏まえた令和7年度の展開について

【座長】 それでは、早速ですが、次第の第3、議事に移りたいと思います。これまで皆様から貴重なご意見をたくさんいただいております。それを事務局が令和7年度の主要な林業振興施策として整理されたとのことですので、ご説明をよろしくお願い申し上げます。

【鑑課長】 森林課長、鑑でございます。

皆様にいただきましたご意見を令和7年度の施策に反映いたしました。今日はその中から、「花粉発生源対策の加速化」、「林業機械の導入拡大等による施業の省力化等」、「木材供給力の強化」、「DXによるサプライチェーンの見える化」、「多様な主体による森林整備支援の促進」、こちらの5つの分野について取りまとめ、それぞれについてご説明を申し上げます。

なお、本日分も含めましてこれまでの議論を集約し、今後ホームページで公表してまいりますので、あらかじめご了承ください。

それではまず、「花粉発生源対策の加速化」における施策について説明します。こちらは3つの視点で取りまとめました。

1つ目は多摩産材の供給力強化でございます。東京都は、花粉発生源対策、森林循環の促進を図るために、平成18年度から東京都農林水産振興財団が実施主体となって主伐事業を展開してきました。現在、日の出町にございます原木市場が取り扱う丸太の7割ほどがこの主伐事業によって伐採・搬出されたものでございます。花粉発生源対策をさらに進め

るには民間の伐採を大きく動かす必要がございます。これまでも間伐等に対する支援はしてきたところなのですが、来年度からは作業道の設置、林業機械の導入など、一体的な支援を行うことで伐採を促進いたします。伐採に意欲的な森林所有者などに対して優先的かつ積極的に資金を投入していくこととしております。また、団塊の世代が85歳を迎えるまで残り10年ということでございます。所有者や境界の明確化は森林の整備におきまして待ったなしで取り組むべき重要な課題でございます。そこで、所有者や境界の明確化に必要な支援を集中的に行いまして、伐採の促進につながるよう環境整備を図ってまいります。これには、司法書士、土地家屋調査士などの専門家も関与する体制を整えまして、森林所有者が森林の管理・経営に関心を持たれるよう仕掛けまして取り組んでまいります。今までにない攻めの姿勢で供給力強化を図ってまいります。

次は労働力の確保でございます。担い手を増やすために、就業に関する情報を掲載するウェブサイト林業就業NAV Iでの情報発信や、全国の林業関係者が集まります森の仕事ガイダンスへの出展を行ってまいりました。来年度からは、さらなる担い手の確保に向けまして、他県でも積極的な求人活動を行ってまいります。具体的には、林業経営体が林業大学校などを直接訪問いたしまして求人情報などを提供いたします。こうした活動に支援をしてまいります。また、林業に従事する方の技術力向上に向けまして各種研修を行っているところですが、これに加えまして、さらに技術を磨いて高みを目指すような意欲のある方には、日本伐木チャンピオンシップへの参加に必要な経費を助成することいたします。

少しご紹介しますが、2024年の大会、直近の大会ですが、プロフェッショナルクラスでは予選に57名の方が出場されまして、決勝に12名が残られました。この中に東京都の技術者も入っておりまして、最終的には4位入賞という好成績を収められました。こうしたことは林業技術者のモチベーション向上につながっていくと考えております。

最後に、環境意識の高い企業との連携でございます。都では、森林整備に関心のある企業や民間の方々による森づくり活動への参加と、多摩産材の利用をより一層促進することを目的といたしまして、とうきょう森づくり貢献認証制度を実施しています。森づくり活動の森林整備サポート認定につきましては、令和6年10月までに56件認定してきたところですが、花粉の少ないスギ、ヒノキへの植え替えが中心でございました。一方、広葉樹への植え替えも対象にしてほしいと森林所有者や植樹活動を行う皆様からの要望をいただいていたところがございます。来年度から認定の対象を広葉樹にも広げ、二酸化

炭素の吸収量を評価することで森林の役割、価値を高めてまいりたいと存じます。

以上が「花粉発生源対策の加速化」についての取組でございます。

座長、よろしくお願いいたします。

【座長】 どうもご説明ありがとうございました。

ただいまのご説明につきまして、ご感想、今後に向けたご意見などございましたら、どなた様からでも結構ですのでよろしくお願いいたします。

【中島委員】 中島です。1番の「花粉発生源対策の加速化」の部分で多摩産材の供給力強化の中でつづってあります林業機械の導入という部分に関しまして、具体的な機械はどんなものを対象にされるかというのを教えていただくと助かります。

【鑑課長】 昨今、タワーヤーダーのような先進機械も導入してきたところでございますが、こちらの事業については、中島さんがやっていらっしゃるような間伐重視の、主体とした事業への手厚い支援を考えておりますので、ふだん中島さんたちがお使いになられているようなものを、少し更新したいなとか、こういう重機のほうが効率的なんじゃないかと思うような機種であれば、東京都が指定するものではございませんので、事業をもしご活用される場合にはご相談いただきながら進めさせていただければと思います。

【中島委員】 ありがとうございます。ある程度使っている側の機械で、あと、場所によってもいろいろなタイプがあるので、それに応じていろいろ支援していただくということによろしいでしょうか。

【鑑課長】 はい、そのとおりでございます。

【中島委員】 ありがとうございます。

【座長】 ほかにご意見ございますでしょうか。鈴木委員、お願いします。

【鈴木委員】 ありがとうございます。待ちに待った広葉樹に拡大された吸収量認証制度、これを楽しみにしておりましたので、ありがたいなと思ってお聞きしておりました。

それから、他県での求人活動、これも、東京は雇用の受皿としても相当あると思うのと同時にニーズもものすごく高いにもかかわらず、なかなか人が採れないところがずっとこの会議でも出てきていたので、他県に広げることは非常にいいことだと思います。いろいろと相当頑張ってくださいなのだなというのが見て取れて、まずはありがとうございますとお礼を申し上げたい。

と同時に、1点、今、この供給力の強化では、大面積皆伐だけじゃなくて、間伐も対象になっていますというようなお話がありましたけれども、とはいえ、ばんばん積極的に伐

採を推進するようなどころだけを応援していても、これは、庄司会長たちからよく出てくる量が足りないという問題に、なかなかこれだけでは間に合わないのではないかといいところで、前回も少しお話しさせていただいたかと思えますけれども、近県との協力、協働みたいなことはまだ議論の俎上にのせてはいただけないのかという質問と、感想とお礼でございます。

【鑑課長】 近県というところでは、直近では特に山梨県の林業関係者、県庁の職員の皆さんとは昨年度から連携しておりまして、一緒に何かできないかというところは少し話を進めているところです。実際に、秋でしたか、山梨県から、東京都で導入した先進機械を見学に来ていただきまして様々意見交換をしたところでございます。

あと、神奈川県の方からも結構、神奈川の方は水源税を確か取られていたと思うんですけども、環境譲与税、環境税が始まったので、その徴税をなくすみたいな方向で話が行っているようなので、ぜひ東京都と連携できればみたいなお話もいただいております。

どのように連携していくかというのは各県の事情が多分違うと思うので、よくよく調整しながら進めていきたいとは思っております。

【鈴木委員】 頼もしくお聞きしておりましたので、何かご相談に乗れることがあれば、ぜひまたここで話しただければと思います。ありがとうございます。

【鑑課長】 お願いします。

【座長】 そうですね。他県との交流であれば、道造りとかお互い技術の研鑽をしていただければと思います。道造りの上手な人に来てもらったり、逆にこちらから行って研修したり、お願いできればと思います。

【庄司委員】 今まで僕らが話してきたことが非常にいっぱい盛り込まれて、非常によくできている、推進だと思えます。でも、花粉が多いからスギを全部伐ってしましましょうとなるとはげ山みたいになってしまいます。木というのは50年、60年、100年たたないと育たないので、その辺をもうちょっと計画的に伐っていくようなのも盛り込んでほしいと思っております。

【座長】 ありがとうございます。

徳永委員、お願いします。

【徳永委員】 ありがとうございます。労働力の確保のところでは林業大学校への支援というお話があったと思うんです。非常に次世代の労働力確保には貴重な人材だなというふうに私も認識しているんですけども、東京都としてどういうふうに林業大学校への支援を考

えられているかというのを少し教えていただいてもいいですか。

【鑑課長】 支援というか、林業大学校は、多分、各県、自分の県で卒業したら働いてほしいという思いが強いんですけども、その中でも、東京にも森林の現場がありますよ、頑張っている人たちを実際に連れて行って、自分のところではなくて、東京の人が通っている場合もありますので、東京にもフィールドがあることを情報提供していくということで、直接大学校に支援ではないんですけども、我々が逆に助けていただけるような仕掛けをしていきたいというふうに考えております。

【徳永委員】 ありがとうございます。結構、林業大学校を卒業されるような人材の方で、うちの大学の演習林でも技術職員の方とかもいるんですけども、例えば林業大学校で培った技術を生かして大学の森林管理に携わってもらうとか、そういう仕事とかもあります。林業大学校もそうなんですけれども、大学との関連もなくはないかなというところがあったりするので、次世代の労働力確保ということを考えると年代別のアプローチというのはどうしても必要になってくるのかなと思っていて、環境への意識というのも小学校から義務教育に入れたほうがいいんじゃないかという話とかもよく出てくるんですけども、小学校とか中学校とかから意識があると、高専へ行く人とかは中学校とかで進路を決めてきたりするので、そういう早い段階とか年齢に応じた教育への支援というのも本当に大事な事かなと思いました。

どうもありがとうございます。

【座長】 ありがとうございます。

ただいまのご意見につきまして何かコメントはございますか。

【司会】 ありがとうございます。年代別へのアプローチというところで言うと、ミズとうきょう林業という、林業に限った話じゃないんですけども、農林水産業の若手のリーダーになるような方を知事が広報のリーダーとして任命いたしまして、様々な場面で情報を発信していただくということもやっております。そういったものも含めて年代別のアプローチというのを少し考えていきたいと思っています。

【座長】 どうもありがとうございます。

先ほど境界明確化のお話もあったんですけども、その中で世代交代が進んでいるということで、ぜひ境界明確化を推進して、次世代の人たちを含めた団地を形成して、そこに林業専用道を入れるとか、そういったことをしていただければと思うんです。そのとき全域境界確定というのも結構時間がかかると思いますので、優先順位を決めていただいて、

木材が出そうなところとか緊急性のあるところでぜひ進めていただければと思います。これは次の供給源になることかなと思います。大変な作業かと思いますが、避けて通れない問題ですので、よろしくお願ひしたいと思います。

それから、いろいろ求人活動とかチャンピオンシップの参加支援とか取り組んでおられますけれども、林業の労働に見合った報酬をどうするか。それから、資格というのか、誇りというのか、それをどういうふうに報酬につなげるかということで、モチベーションを高めるようなこともぜひつなげていただければと思います。

それから、私ばかり言ってもしょうがないんですが、広葉樹といっても、じゃ、樹種は何ですかというようなことで、そのとき苗木はあるのか、その辺もやはりいろいろ大事なかなと思います。放っておけば確かに広葉樹は入ってくるんですけども、もう少し東京都にふさわしいような広葉樹ですね。中島委員のアドバイスも受けながらいろいろ取り組んでいただければと思います。

**【鑑課長】** 広葉樹については、農林総合研究センターのほうでも、標高とかを考えながらどこに何を植えるのが適切かという研究もしているところなので、そういったものも参考にしたいと思っております。

**【中島委員】** 労働力の確保のところ、皆さんの意見を聞いてちょっと思ったんですけども、労働力の確保というと、具体的に現場の実践する方の労働力というところが重きになるのかなとは思うんですけども、いろんな施策と実際に現場で働いている人の間に、そこをコーディネートできるような行政職員というか、地域で地域の山を運営管理できるような人材というんですか、地域コーディネーターみたいな人をうまく育成すると、もう少し行政でつくった施策と現場との意見がうまく整合されてマッチしてくるんじゃないのかなと思うので、熟練者というか、そういった人をうまくコーディネーター的な形で配置できるような仕組みができるといいのかなと思っています。

**【座長】** ありがとうございます。

その辺、何か具体的なことは考えておられますか。

**【鑑課長】** 前々から、そういうコーディネーター的な人がいるといいよねという話にはわかにはいるんですけども、やっぱりその人材という点で誰がいいのかなというところもありますので。例えば森林組合のOBの活用ですとか、あるいは、退職後に、実は山を持っていて山をやっていたんだみたいな方だとか、そういう人材の発掘も含めて、実際現場で中島さんなんかは林業研究グループもされておりますので、そうした中にも適当な

方がいらっしゃるのかもしれないし、ご相談をしながら進めさせていただきたいと思えます。

【座長】 そうですね。実務にお詳しい方が必要かと思うんですね。林政アドバイザーですとか森林総合監理士さんとかいろいろあるんですけども、やはり実際の流通の流れを分かっている方ですね。流通加工コーディネーターという資格が確かあったと思うんですけども、非常に大事ですね。特にサプライチェーンを回すにはコーディネーターがいないと回らないので、ぜひそういう仕組みをつくっていただければと思います。

庄司委員、この辺で需要側として何かございますか。

【庄司委員】 需要側とすれば、やはりもっと供給が増えてくれないと、というのが一番ですね。

【鈴木委員】 量を束ねましょう、量を。

【座長】 そうすると、巡り巡って境界明確化して、団地をつくって、道を入れて、機械を入れてという、その辺のところですね。優先順位をつけていくというのが大事なかなと思うんですね。

よろしいですか。話は尽きないのですが、まだまだあと4項目ございますので、先へ進みたいと思います。

それでは、2、「林業機械の導入拡大等による施業の省力化等」についてご説明をお願いいたします。

【鑑課長】 では、ご説明を申し上げます。

こちらは「林業機械運用のための環境整備」という視点で取りまとめさせていただいております。東京都は、森林GIS、地理情報システムを整備し運用しているところでございます。現状は、主に担当ごと、事業ごとに使っているところではあるのですが、今後は、できるだけ効率よく多くの木材を収穫することの視点を重視いたしまして、森林情報を有効活用し、主伐・間伐事業と連携を図りながら、総合的な管理を視野に、例えば使用頻度の高い核となる林道を優先的に整備していくようなところに結びつけていければと思っております。それで、林道の拡幅が必要だとか、橋がこういうふうにあったらいいとか、道はこう入れたらいいとか、そういったところにつなげていきたいというふうに考えております。

また、主伐事業におきましては、架線集材を中心に行ってきたところですが、林道から離れた場所においても伐採・搬出を進められるように、タワーヤーダーやICTハ

ーベスターなどの先進林業機械を活用できるような作業道を設け、安全で生産性の高い作業を目指してまいります。

以上が取組になります。座長、よろしくお願いいたします。

【座長】 ありがとうございます。

ご質問等ございましたらお願いいたします。

これは先ほどの1番の機械導入の支援と関連すると思うんですけど、東京都の資源が育ってきて主伐もできる。先ほど主伐にタワーヤーダーというお話もございましたけれども、大面積皆伐という手もあるんでしょうけれども、そうすると大面積に植林しなければいけないというプラスとマイナスがあって、大面積に植林して面倒を見切れるかどうかという労働力の見通しができないと思うんですね。そういった更新コスト等も絡めていろいろ森林の扱いを検討していただければと思います。

例えば小面積皆伐をしてタワーヤーダーで出していく。その面積を、小面積の現場の事業量を確保するためにはたくさん造って、タワーヤーダーを機動的に移動させていくとか、主伐もやりようがあると思うんですね。それから、大面積で植林となると熱中症ですね。夏は非常に暑い日差しの下にさらされますので、日陰をつくりながら皆伐する。どうしても日の当たるところはしょうがないですけども、休むときには日陰に入れるようにとか、木の伐り方もいろいろあるんじゃないのかなと思います。特に高齢林になってくれば高齢林の小面積皆伐、列状間伐もあり得るかな。これはタワーヤーダーを使える。それから、間伐もまだ要ると思いますので、それは小型のタワーヤーダーとかいろいろなウインチを使ってとか、いろんなやり方があるのだらうと思います。そういったことで、ぜひ、林業機械、タワーヤーダーが何台要るのかとか、小型のウインチ、スイングヤーダーが何台要るのか、そういう台数を計算して、生産量も設計して、それに応じた作業員の数とか、そういう設計をしていただけると人を呼び込むにもやりやすいのかなと思います。

それから、この資料を作っているときにロサンゼルス山火事があったと思うんですけども、今は世界各地で大規模な山火事があって、一回山火事があると飛び火するんですよ。火の粉といいますか、あちこちへ飛ぶのでモグラたたきみたいになっていく。そのときに、いい林道といいますか、林道があると現場に駆けつけられる。それから、ある程度広い林道というのは防火帯にもなるし、乾燥期にはそこで散水してもいいですし、場合によっては花粉を水で洗い流してもいいかなと思ったりしていますので、ぜひ花粉症対策と絡めてそういう防災対策もつくっていただければと思います。

最近、本当に日本でも大規模な山火事が起きていまして、この前も山梨県でもありましたけど、消すのが大変ですね。結局、雨を待つしかないという状況だと思いますので、いろいろそういった山火事対策もこれからは大事かなと思います。

【庄司委員】 やはり林業ですと労働災害というものも非常に多い業種でございますので、ぜひともこの機械導入をどんどんやっていただいたほうが、労働力確保という点でも僕は非常にこれはいいと思っております。

【座長】 ありがとうございます。

ほかに、徳永委員、何かございますか。特によろしいですか。

では、中島委員、お願いします。

【中島委員】 林業機械のほうですけれども、こういった人が乗り込むような機械もあれば、人間のもとと持っている動きをサポートする体の補助具みたいなものもあるといいのかな。あと、前にも言ったかと思うんですけれども、通信機器、林内でのコミュニケーションというのは、電波が届かないところですか、あとは通信がなかなかできないところとか、ましてや架線なんかを使うと、見えないところで無線でのやり取りで、もう信頼関係のみみたいになってしまうので、そこら辺でのコミュニケーションを密にするための通信機器みたいなものを導入していただくとありがたいのかなというふうに思っています。

【鈴木委員】 何か考えていらっしゃるんですよね。きっとロボットとか通信機器とか、何かありそうじゃないですか。

【鑑課長】 考えているというか、実は、山の通信状況が悪いところを問題視されている企業さんがいらっしゃるしまして、W i - F i が有効的に稼働するような実験実証というものに協力していただけないかみたいなお話がありましたので、そういったものには積極的に関与しまして、庄司委員がおっしゃったような労災を減らしていく。何かあったときにすぐに連絡が取れる。東京の山はハイカーも非常に多いので、そういった方の安全を守るという点でも通信は大事かなと思っておりますので、民間の企業さんの技術に頼れるところは一緒に知恵を出し合いながらやっていこうという、本当に最近ホットな話題であったんですが、そういうことがございました。実際まだ現場には入れていなくて、今本当に事前の調整中ですけれども、年単位だと思うんですが、進んでいけばいいなと思っておりますのでございました。

【座長】 ありがとうございます。

鈴木委員、何かございますか。

【鈴木委員】 少し話がそれるというか、先ほど来の労災を減らしたり、要は現場の労働環境の整備にも直結するような話なので、林業のイメージアップにもつながるし、労働力確保にもつながるといってお話が出ましたけれども、さらにこの前のテーマで徳永委員がおっしゃっていたような世代別、年代別の未来の林業家を育てるとか、林業への興味を育てるみたいな話になったときに、これ、危険なんですけど、私、各地でまさに大面積皆伐跡地を再生していく事業をやっていると、こういう高度な機器が置かれているような現場へ行くと結構興奮して見るんですよね。楽しいですし、わくわくしますし、見ていると壮観ですしね。子供たち、もうちょっと若い人たちにも、全く林業に今までほど遠いような都会の子たちでもいいですし、働く車でも、こんなところでこんなに働いている車があるんだよというのを見せられる。それは現場に行くとは危ないのだったら、オンラインでもいいですよ。何かそういう工夫もできるんじゃないかと思う。せっかくここで投資したりするのであれば、こういう現場をつくられるのだったら、そんなことにも使っていただけたらなおいんじゃないかなと思いました。

【鑑課長】 後段、少しその辺のネタが出てきますので、よろしくをお願いします。

【中島委員】 あと、林業機械の部分で、どうしても伐出機械のほうがメインになってきてしまうかと思うんですけれども、結局その後の保育の部分で、主伐した後に苗木を植えて、下草刈りをしてという現場は多々あると思うんです。その後の枝打ち現場——近隣のところで見てみると、枝打ちがなかなか進んでいなくて、要は、これからせっかく大きくなって、いい材をつくらうとしても、枝打ちをされていないので節だらけの材が増えてきてしまう可能性も十分あると思います。枝打ちの機械とかもいろんなメーカーさんが作ったりしているので、そういった機械の導入とか実践とか事例をどんどんつくってほしいと思っています。やっぱり径が太くなってしまいます。枝打ちするタイミングもどんどん遅くなってしまえば枝も太くなってしまいますから、枝を打つのも大変になってしまうので、せっかく各種メーカーさんが機械を作ってくれていても、いざ使ってみようと思ったときに枝が太過ぎて機械がなかなかうまく動作できないとかもあるので、枝打ちをなるべくもう少し進めたほうが。せっかく植え替えたところの木が大きくなってきているので、そこら辺も少しやられたらいいのかなと思っています。

【鑑課長】 確におっしゃるとおりで、伐採を進めていけば当然保育の規模も大きくなっていきます。機械も恐らく進歩発展していくと思いますので、そういった情報もしっかり取っていきながら、また、現場で働く方の意見も取り上げながら、どういう機械がいい

のかというところを参考にさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

【座長】 こんな機械が欲しいとなると話が尽きないかと思うんですね。理想的には自動でリモコンでできるのもあるし、いろいろあると思うんですけど、またその辺はお時間が余ったときに少し議論したいと思います。最近、ICTハーベスターですか、触っただけで自動的に枝払い、玉伐りするというのがありますので、それを誰が使うのかということでまたいろいろあるかなと思いますけれども、またそれは時間があつたときに話題にしたいと思います。

それでは、先へ進ませていただいて、3番目の「木材供給能力の強化」について事務局からご説明をお願いいたします。

【鑑課長】 では、ご説明をいたします。ここでは3つの視点で取りまとめいたしました。

最初は原木市場の機能強化でございます。これまで説明してきましたように山側の施策を強化することで順調に伐採・搬出が増えてまいりますと、流通の要でございます原木市場に丸太を置き切れなとか、安全な作業ができないとかの事態が発生いたします。そうならないように円滑な流通を確保するため、市場の運営の効率化に向けました支援をしっかりと行ってまいります。来年度につきましては、市場の敷地の拡張に向けまして、周辺における猛禽類などの生息調査や地下水への影響調査などを進めてまいります。

次は外国人材活用の可能性の検討でございます。円滑な流通を確保するには、原木市場の整備だけではなく、丸太を加工する労働力の確保も不可欠でございます。昨年、特定技能制度に木材産業が追加されたことから、外国人材の受入れも視野に、製材事業者の実態、受入れへの課題についてしっかりとヒアリング調査を行ってまいります。

最後に、木材生産力の強化でございます。木造戸建て住宅の建築確認の手続が見直されまして、この4月以降にJAS規格を満たす木材の需要が高まることが予想されます。そうしたことから、製材事業者のJAS認証取得を支援してまいります。また、労働安全対策に関連します各種資格の取得や雇用環境の改善に対する支援も行いまして、労災のない魅力ある職場づくりを後押ししてまいりたいと思っております。

加えて、多摩産材を取り扱う製材事業者の施設整備に係る経費の支援につきまして、その対象を新たに首都圏の事業所まで広げまして、多摩産材を生産する製材所であれば支援をするということでございますが、そういうことをして多摩産材の製材供給力の増加につなげてまいります。

以上、主な取組でございます。座長、よろしく申し上げます。

【座長】 ありがとうございます。

ご意見等ございましたらよろしく申し上げます。

【鈴木委員】 質問をよろしいですか。最後の、多摩産材の製材事業者であれば、要は他県でもということですか、これ。どこまででも。

【鑑課長】 そうです。一応、首都圏近郊。

【鈴木委員】 首都圏なんですか。それ、首都圏は4県までですか、3県までですか。まだまだ決まっていない……。

【鑑課長】 細かいところは、はい。

【鈴木委員】 いや、広がり過ぎても、量が少ないからどうするのかなという質問だったんですけども、じゃ、決まったら教えてください。

【座長】 庄司委員、何かございますか。

【庄司委員】 私も原木市場さんを見学させていただきましたけれども、並べてある丸太が転がってくるとか、そういうこともありますので、安全対策ですとか。そういう意味では、買って、すぐ持って行ってくれればいいですけども、そのままちょっと置いておくという業者さんもいると思いますので、やはり置き場というのは広いほうがいいと思います。また、夏ですとか雨の日ですとか、そういうものもございます。そこで丸太を置きっ放しにして品質がよくなるわけでもないと思いますので、その辺は強化していただいたほうがいいと思います。

【座長】 ほかにご意見ございますか。中島委員、お願いします。

【中島委員】 木材生産力の強化というところで、伐出している我々からするとすごく喫緊の問題なんですけれども、製材業者さんを他県に頼る、近郊に頼っているという部分と、うちも実際に持っている課題ではあるんですけども、管理している山林が隣の埼玉県にもあったりするので、そこら辺の森林管理の部分も、他県との情報交換というか、そういったネットワークを広げながら、何々産材とどこもうたいたいとは思いうんですけども、そこら辺のバランスですか、連携を上手にできる方法を模索していただきたいというふうに思っています。

【座長】 ありがとうございます。

今、結構トラックの運転手さんを確保するのが大変で、そうすると、材が貯まってもすぐ出せないとか、そういうことも考えて、前回以来お話がございましたけれども、広い場所が欲しいということかと思えますね。ある程度の在庫があることで需要と供給のバランス

も取れると思いますので、在庫量が少なくて木材価格が上がるとか、逆に、あふれそうになって持ち出せないとかがないように、ぜひ広くて十分な場所を造っていただければと思います。

それから、やはり需要をつくるということが大事かなと思って、ぜひ需要の拡大に取り組んでいただければと思います。

それから、JASの認証ですね。これも、中高層の建物でどうしても構造材にJASを使わざるを得ない。ところが、手に入らないことのないように、ぜひ供給体制をつくっていただければと。一方で、別にJASでなくてもいいという部分もありますので、もう少しカジュアルに使えるような流通もつくってもらえればと思います。

お願いばかりですみませんけれども、ぜひ政策に反映していただければと思います。

**【庄司委員】** JASに関しては、僕らが扱っている木というのは自然そのものですから、自然そのものにJASをどうやって適用していくかというのは非常に難しいところで、ほとんどが集成材ですとか工業製品に変わってしまうのではないかと私は危惧しております。だから、その辺は、中島さんはどういうふうに取り組んでいくのか。機械もその等級とかなんかも、それなりの機械をまた買わなくてはいけない。また、供給のほうでも、私も多摩産材を使って公共建築物を造ったときに、多摩産材は手に入れられたのですけれども、それを製材するところができなくて他県に持って行ったという実情がありますので、その辺をまたお聞きしたいんです。

**【中島委員】** 今のお話から言うと、僕のほうとしては量が全然ほかの伐出業者さんよりも少ないので、大きいものとかでJAS認定とか、そういうところまで全然取組はできないんですけれども、まず、そもそも木を伐って出してくるまでこれだけ大変で、あと、製材するところこういうところがこういうところに使えるんだよというのを知ってもらう場を増やしています。その中で、JASの材とか集成材も、どうしてこういうふうになるかというのを扱う側の人間が知ってもらいたいと思っていて、設計される方とか素材が欲しい人たちが、どういうふうにしてその物体ができているか分からなくなっている状況とかがあるんじゃないのかなと思っているんです。そこら辺はまだ時間はかかるとは思いますが、そういう知っていく場を増やしていかないと、何々材が欲しいというところだけに話が進んでしまって、そもそも何々材を作るためにはというところが欠けてしまっている部分を日々感じているので、すぐ解決にはならないんですけれども、そういった根本的なところからやらないと難しいんじゃないのかなと僕は今思っています。

【座長】 どうもありがとうございます。結構難しい問題ですね。苗木とか再造林の費用をどうしているんだとか。要するに、原価をどういうふうにはっきりさせて、それを価格に反映させられるかというところまでいってしまうと話が大変かもしれませんね。ここでは、多摩産材が円滑に流れてきてというか、出てきて、きちんと需要側に行く。そのとき非常に低コストといいますか、コストをかけずに供給していく。広く使ってもらえるにはどうしたらいいかということではないのかなと思うんですけれどもね。

あと、品質向上も、見せていただいて、きちんと乾燥していただいて、ヤング率も測っておられるので、品質は保証しますよということであれば、それがブランドになるんだろうと思います。木が大きくなってくるとヤング率も安定してきますので、安心して使えるようになるのかな。あと、ラミナとか集成材に回ってということですけど、それはそれで、そういう産業を導入すればいいことかなと思うんですけれども、そういうポテンシャルは高いと思いますので、非常に大事なテーマかなと思います。

あと、「何で多摩産材を使うんですか」とか、そもそも論になってくる。「国産材を何で使うんですか」とか、「輸入した材木で安く建てたほうがいいんじゃないですか」という話もあるんですけれども、それに対して、「何で多摩産材か」というところはきちんと説明できないといけないと思うんです。この辺、徳永委員、二酸化炭素の利用ということで何か話題をいただければと思うんです。

【徳永委員】 ストレートな話ではないかもしれないですけども、流通を増やすところで何が必要かというところ、人手が足りないというところで、人手が集まると結果的に流通が促進されて、二酸化炭素的な意味でも林業の施業が推進するところが落ち着くのかなと思っています。先ほどの原木市場の機能強化もそうなんですけれども、何か例えば施策的なものもきっとそうなんですけれども、それをどうやってコーディネートして人をあてがうかというところが重要になってくるかなというふうに思っています。

先ほど一番最初の議題でも流通コーディネーターというようなキーワードとかもあったと思うんですけども、行政としてその仕事を請け負うような形で、例えば、原木市場の機能を強化する役割も担ってくれるし、教育への支援も担ってくれる。都が雇用するような短期間でもいいと思うんですけども、いろいろできる人材がいるのが結構ポイントかなと思っています。そういった多機能な仕事をしてくれるプレーヤーという人が結果的に供給能力の強化ですとか、林業の施業を推進してくれるのかなと感じているところです。結果的にそれが外国人の雇用とかそういったところにもつながってくるかなと思っている

ところです。

【座長】 どうもありがとうございます。

中島委員、何か補足がございますか。

【中島委員】 東京で言えば、森林資源が全体的に他県と比べれば圧倒的に少なく、需要としてはめちゃくちゃあるわけじゃないですか。だから、東京だけではできないわけなので、東京が東京の材で、JAS認証とかいろいろ高品質な木材とか東京の木で作ろうとすればするほど東京の木の枯渇は早くなってしまわないかというのがあって、それを補うためには他県からもいい材を取らなきゃいけないので、他県との連携も必要なのかなと思っています。

東京の木は、いいも悪いも当然いろいろあると思うんです。手入れが行き届いていなかったり、所有者が分からないとか、そういう問題もまだまだたくさんあるので。そういったところで東京の木のJAS認証にこだわり過ぎてしまうとちょっとずれてしまうから、それがすごくいい貴重なものなんだよというのを分かってもらいたいのですね。それを作るまでに無駄に山の中で捨てられてくる木々もたくさんあるわけですから、それがどうやってできているかというのを全体的に知ってもらって使ってもらわないと、なかなかその価値が、認証材だから、ただそういう名前だけ走ってしまうのが怖いかと思います。

【鈴木委員】 関連して。今日きっとどこかでその話が出てくるんじゃないかなと期待しているのですけれども、ずっと私も災害連携協定みたいな形で、ユーザー同士の、都知事主導で、今23区で都市の木質化協定みたいな、あれは何協定というんでしたっけ。

【鑑課長】 環境譲与税ですか。「多摩の森」活性化プロジェクトです。

【鈴木委員】 そう、そう。あれの供給側のほうの連携協定で、多摩産材の供給量が足りなくなったときに、じゃ、さっきおっしゃっていた埼玉産、神奈川産、それから千葉産。どこも少なくて困っているわけですから、同じような悩みを抱えているわけですね。品質の話はずっと座長がおっしゃっていますけれども、どこの県の認証材も結構しっかりと品質管理していらっしゃるから、絶対自分は、例えばユーザーとして多摩産材100%でなければ嫌だという人はほとんどいなくて、東京五輪のときの競技場の話もそうでした。国産材がいろいろ集まって、あれはあれで話題になるし、あれはあれである一つのブランド価値を創出できたと思っています。

そんな形をするには、でも、やりにくいという話がいつもこの会議でも事務局の鑑課長のほうから出てきていますけれども、なかなか一足飛びにそこまで連携協定を結ぶのは難

しいですみたいなお話は分かるので、いっそのこと本当に災害連携協定をまずは3県と結んで、災害が起きたときは完全にその地域の木材は足りなくなりますから、それでサブリミナル的に木材を融通し合うという構造をつくってしまう。インフラをつくってしまう。一回やるとみんな慣れるんですよね。最初の一步は、自分のところの材は自分のところだけでなきゃ嫌だみたいな人たちが必ず出てくるんですけれども、何か有事のときに協力し合うというのは、日本全国そういう美しい精神性とか性質は持っていますから、今ある災害連携協定の枠組みの中で木材の流通みたいな、地域材の融通という項目を入れるだけでも何か一步踏み出せるんじゃないかと思っていました。

【座長】 どうもありがとうございます。

今、災害連携というお話が出て、能登の地震のときにその重要性が大分認識されたかと思います。ある程度土場にあって、たくさんストックがある。ある大手の製材工場は天然乾燥のためにずっと製品を乾かしていますけれども、災害が起きてから伐っているのでは間に合いません。ある程度備蓄しておくそれが復興を早めるので、事前復興になるだろうと思いますので、やはり災害に備えてある程度のストックが要る。それに対して税金をかけないとか、そういう優遇措置があれば、今は労働力が余っているから増産してそちらへストックしておこうとか。それから、いいパネルを作ろうとすると、ちょっと節があるとはねたりして、せっかく使えるのにはねてしまう。そういうのは安くといいますか、復興資材にキープしておくとか、いろいろなやり方があるんだろうと思います。

それで何を言いたいかという、木は倒して利用しないと、そこから全部CO<sub>2</sub>になって出ていくので、倒したら必ず利用しないとCO<sub>2</sub>の発生源になってしまいます。その辺は徳永先生がお詳しいんじゃないかと思います。伐ったらなるべく有効利用する。それから、腐る部分は熱利用するとか、いろいろな炭素循環のこともしっかり戦略に入れていく必要があるのかな。

先ほど中島委員から大事なご指摘があったんですけれども、あまりこだわってしまうと孤立化を招くんですよね。大手のゼネコンさんはそれぞれ防火の特許を持っているのだけど、そこに執着してしまうと利用量がはけないということで逆に孤立化してしまうので、なるべく共通部分はみんなで作ってもらおうということで話を進めていただければと思います。

ここもいろいろご意見があろうかと思うんですけれども、ひとまず先へ行って、また戻ろうかなと思います。

では、「DXによるサプライチェーンの見える化」についてご説明をお願いいたします。

【鑑課長】 では、ご説明をいたします。こちらはサプライチェーンの構築という視点で取りまとめました。DXというのが林業業界にはあまりなじまず、浸透が遅れているとも言われているところがございますが。

右手に、ちょっと見にくいんですけど、フォーマットのようなものがあると思うんですけども、現在、伐採出材の業者と原木市場、それぞれが伐採量、市売情報をそちらに入力いたしまして、製材業者を含めて閲覧できるようなシステムがございます。製材事業者は伐採量とか市売情報を見ることができるのですが、伐採出材事業者は、実は製材事業者が何をどれくらい買っているかということは一切見ることはできません。それは至極当たり前というところもあると思うんですけども、商売の情報になってしまいますので、今そちらは見られないような情報になっております。

他方、工務店、建築関係者などからの需要が必ずある。今需要がありますので、そうしたものに応えていくには、丸太の直径とか長さ、どんな樹種か、あとはいつ頃供給できるのかの情報を利用者に提供していくサプライチェーンの構築が求められております。従前、皆様からのご意見にもございました。昨年9月に造材情報を収集、蓄積できるICTハーベスターがようやく現場に入りました。伐ったと同時に造材の情報を蓄積していくんですけども、この情報と製材事業者が持つニーズ、需要の情報を製材屋さん、工務店さんとか建築関係の方からこういう材がこれくらい欲しいんだけどみたいなことはささやかれていると思いますので。あと、原木市場も含めまして、皆さんが共有できるようなプラットフォームをシステムに追加しようかということで進めてまいります。

木材を供給する森林所有者の方、素材生産者の方、需要のニーズを持っている製材事業者の方が少し先の情報を出し合いまして相互に把握できるようにすることで、必要な時期、必要な量を確保する。そういうことができるよう、スムーズな調達に貢献できるような仕組みを考えております。森林所有者または伐採搬出事業者にとっては、木を伐り出すタイミングを見計らうことが可能になりますし、効率的な伐採、森林経営に効果的な取引に結びつくことが期待されております。

また、多摩産材の情報発信拠点MOKUNAVIがあるんですけども、そちらでは森林関連のイベント、それから外部展示会に積極的に出展することを来年度新たに始めますけれども、一般消費者及びプロユーザーへの情報の発信、製品の供給者と利用者のコーディネートにさらに力を入れてまいりたいと存じます。

よろしくお願ひいたします。

【座長】 ありがとうございます。

何かご意見等ございましたらお願ひいたします。

【鈴木委員】 質問をよろしいですか。ありがとうございます。非常に望んでいたようなのがすごい絵に描かれて、うれしいなと思ひながら見ていたんですけども、このシステムの仕組みのユーザーはどこまで公開されるものなんですか。公表される……。

【鑑課長】 現在は、利用者は製材事業者までになっております。資料にも書かせていただいたんですけども、将来的には、例えば鈴木さんなり私なりが、いつ頃山から伐って、どんな製品を作りたいのか、いつ頃出てくるのかみたいなのを見られるようにできるといふ感じですか。まずは製材事業者で、様々な情報を持っていて、実際、製材さんの取引につながるかどうかというのは民衆の契約になりますので分からないんですけども。ある程度どういった需要があるのかというのを中島さんなり山の持ち主が把握できたときに、うちでここからいつ頃なら伐り出せるよとか、そういったご商売にもつながっていくのかな。また、市場も介入できますので、ある程度の量を取りそろえるにはやはり市場の機能というのは非常に重要ですから、市場の営業活動にも活用していただけるのかなと思っております。まずは製材事業者までをしっかりとプラットフォームで情報共有化できるところを整備していきたいというふうを考えております。

【鈴木委員】 先ほど酒井先生がおっしゃっていた需要の喚起みたいなのも同時にやっていたかなければというお話もあるので、個人は後からでもいいんですけども、せめて工務店さんみたいなのところ、ここを一緒に入れてしまっても。これ、次年度に構築が始まるんですね。その頃からある程度の需要の入り口みたいなのところ、ユーザーの入り口みたいなの人たちには入っててもらわないと、やる気も。製材事業者さんはこういうことにあまり慣れていらないから、そこにしっかりと、本当に使ってくれる人がこれだけ待っているんだという人たちも見えたほうがこのプラットフォームそのものが活性化するんじゃないかと思ひました。

【鑑課長】 ありがとうございます。システムの構造とか私は全然分からないですけども、そういった先のことも見ながら、プログラムみたいなのところが広がっていくように、工夫ができるように、実際そういったことをされる専門家の方と相談しながらやっていきたいと思ひます。

【座長】 ほかにご意見はございますでしょうか。中島委員、お願ひします。

【中島委員】 このDXの部分で一番苦手なほうの部類になるかと思うんですけども、山側だとDXの部分というのは、前のページであった森林情報の部分で、情報が現場の伐る人に伝わらないと意味がない。例えば、ユーザー側がこれくらい、樹齢幾つで、ヒノキだ、スギだ、直径これくらいのが欲しいよといったときの情報がうまく、森林簿とかで管理している地図情報から、この辺だったらこの木が手に入りそうだというのは、山をやっている側の人間はある程度把握していると思うので、それが逆に、欲しい人たちがいると分かっていたら、例えばこっちを先に集約しようとか、作業道をこっちに延ばそうかというのも考えられる。そこら辺の需要の情報を伐る側、現場のほうに。結局、現場で伐る人になってくると、欲しい材がどういう材だというのが分かって伐れたら一番最高だとは思いますが、今のところはそれがなかなかできていないとは思いますが、そこら辺がもう少し情報が現場に伝わるとありがたいなと思います。

【鑑課長】 課題というか、今、伐採出材する事業者さんが入力するというお話をさせていただいたんですけども、実際に入力しているのは農林水産振興財団のほうで入力していて、中島さんは実際には入力したことはないと思うんです。民間の出す側の人たちにもぜひこのシステムに乗っかっていただくことが重要ですので、山からこれだけ出てくるよという情報発信も大事なんですけれども、できるだけ中島さんがおっしゃったように、山側が需要側をキャッチしてうまく経営に役立てられるような仕組みになればいいなと思っておりますので、ぜひ引き続きお知恵を貸していただければと思います。お願いします。

【座長】 これは大きく取引形態が変わる話かなと思うんですけど、昔は市場へ出せば全部売れたわけです。ところが、直送となると、納品先から情報はもらえるんですけども、全部買って欲しくないというデメリットもあったわけですね。それで、プラットフォームがこうやってつくられる。ここで話題になるのは予想の数量と予想価格だと思うんです。それに応じて山側のほうが生産体制に入っていくのだらうと思いますのでね。ここで1社、2社が入ってもしょうがないので、製材、いろんな加工業者さん、工務店さん、山側ということで、それぞれのクラスター、産業クラスターが集まる。全員集まると大変ですけども、代表者を集めてそういう情報交換の場ができれば、それに応じた供給体制ができていくのかな。市場へ出していたプロダクトアウト型から、欲しいものを優先して作るというマーケットイン型になっていく。それで売れ残ったのがあれば、それはバイオマスで引き受けましょうということで、最後は燃やすわけではないんですけども、これからいろいろ脱プラ関係で欲しい人も出るし、ほかの地域へ持っていくとか、いろんな樹種ごとの

違いもあると思うんですけども、そうなるかな。

何を言いたいかという、大分取引が変わるわけで、その中でこうやって山側と川中、川下のマッチングができればと思います。そのときに透明な情報にしないといけない。それから、変に不安をあおったり、そういうことのないように、きちんとした情報に基づいて情報交換できれば無駄もなくなるし、山も造りやすい。山側も供給しやすくなるかなと思います。理想は理想ですけど、いろんな思惑もまた入ってくるからなかなかいきませんけれど、その辺、手を差し伸べるのが行政の役割だと思いますので、ぜひそういうお膳立てをしていただければと思います。

**【鑑課長】** 確かにおっしゃるように、最初は新しいものへの拒否感というのがすごく強いようですので、当初このシステムを導入するときも非常に遠巻きにされたような印象があります。最初が肝腎というお言葉もありましたので、しっかり分かりやすく説明をして、プレーヤーがやりやすいようなシステムづくりが重要なかなと思います。プログラミングの方と相談しながら。何が使いやすいって、人それぞれ使いやすさが違うようなところもあるので、皆さんが「これならできるな」という扱いやすいものをまずは目指していこうと考えています。

**【座長】** こういうモデルは北欧でできていて、商売になっているんでね。それで木造住宅率も上がっていくし、非住宅の内装も使える。要するに、林産業が地元で栄えていくわけですので、ぜひ、北欧版ではないですけど、東京版のこういうプラットフォームをつくっていただければと思います。

庄司委員、何かありますか。

**【庄司委員】** 商売人とすれば、もうけることしか頭がないので、こういうものをつくると、「俺のほうが安く買えるんじゃないか」とか、そういう人たちも入ってくると思うので、その辺をよく構築していただいて、それこそみんなWin-Winの関係になるようなものがないと思いますね。

**【座長】** 徳永委員、何かございますか。

**【徳永委員】** ありがとうございます。とてもいいと思います。需要と供給のマッチングができるという意味では、需要サイドと供給サイドが情報を提供して、提供した情報のみを限られた人が閲覧できるようにすることで必要十分な情報が得られる仕組みになっているのかなと思うんです。例えば、東京は、東京の会社がすごくお金があって、大量の木材が欲しいというような要望がある。であれば、東京だけではなくて、別のところで、少し

運送費がかかっても他県からでも買いたいんだけど、そういう情報はないのかなとか。多摩産材に限らずに、逆もまたしかりだと思うんですけども、他県の方が多摩産材を使うと何か付加価値を感じるということであれば、そういう情報を得られてもいいと思うんです。行政が主導するということがすごくいいことだと思うので、例えばほかの自治体との連携とか、他県との連携、あと所有者が分からないところとかは国との連携で山をどうしていくか。将来的にはそういう議論も必要になってくるのかなと思いますので、行政が、すごく遠い未来のことかもしれないですけども、そういうところまで視野に入れていただくと、このシステムがもっと便利で、いいものになっていくのではないかなと思います。

**【座長】** ほかによろしいですか。

それでは、ぜひ進めていただければなど。東京版DXといますか、つくってもらえればと思います。よろしく願いいたします。

それでは、5番目になりますけれども、「多様な主体による森林整備支援の促進」についてご説明をお願いします。

**【鑑課長】** 説明いたします。ここでは2つの視点で取りまとめをいたしました。

まず、新たな担い手発掘でございます。都は、未来の森林・林業を支える人材を幅広く育成する観点から、保育園などでの木育活動、施設の木質化などへの支援、また、小学校・中学校に多摩産材の端材を副教材として活用してもらうなど、幼少期から木に触れ、東京の森林や木材に理解を深めてもらうような機会を提供してございます。来年度は木育事業の対象を高等学校まで広げまして、森林・林業に関する学習方法などを提供する木育アドバイザーを新たに設置して派遣することとしています。また、山しごとを知ってもらう、体験してもらうため、山側に特化しました、注目を集めるようなイベントを計画しています。林業技術者のパフォーマンスやチェーンソーなど、林業機械の展示・体験などを通じて「山の仕事は格好いいんだ」というふうに感じていただきまして、未来の林業技術者や森林・林業のファンの増加につなげてまいります。

次は森林空間の活用でございます。東京の森林・林業を多くの方に肌で感じていただくためには、森林をフィールドにした体験ツアー、体験学習などが重要な役割を果たします。これまで東京都が直接ツアーなどを企画して実施してきたところがございますが、来年度からは民間の企業、団体などと連携して取り組みまして、彼らが行う活動を支援するという形でやっていきたいと思っております。それぞれが得意とするやり方によって、東京の

森林・林業の魅力がより効果的に普及していくことを期待しているところでございます。これまで皆様から、年代別みたいなお話とか、民間の普及啓発をやりたいけど、なかなか人手がないんだみたいなご意見もいただきましたので、そうしたところを踏まえて施策に落とし込んだところです。

以上でございます。座長、よろしく申し上げます。

【座長】 ご説明、ありがとうございます。

ご意見、ご質問等ございましたらよろしくお願ひいたします。

【鈴木委員】 先ほど、後で出てきますとおっしゃっていたのは、これだったんですね。すごくいい。今までこういう話はいっぱいこの中でも出てきているので、しっかり盛り込んでいってほしいなと思って頼もしく拝聴しておりました。

例えば、このフィールドとか体験ツアーを、民間を支援する形で間接的にという話だったと思うんですけども、どういうところでこういう活動をしている民間団体の情報を都でお持ちでいってほしいのか。これから集めるのか、登録制にするのか。その方法をお聞かせいただきたいです。

【鑑課長】 もちろん事業の立てつけは今必死で相談しながらやっているところですけども、実は、前々から、こういう活動を東京の山でやっていってほしい団体の方々に「そういう支援はないんですか」と言われていたことがございます。また、この専門懇談会を通じて中島委員のほうからもたくさんご意見をいただきましたので、実際、山をフィールドに、あるいは、山ではないんですけども、直接学校とかに行っている団体さんとかもいらっしゃいますので、そういった方々のやっていってほしいことを支援することで東京都にとってもプラスになるよねと。まして都主体で考えるとなかなか広がりがいいということもございましたので、どこまでというのはあるんですけども、基本は東京都という行政主体なので、都内の活動を中心とされるところを支援していきたいというふうに考えております。

【鈴木委員】 そうだなとは思っているんですけども、随分前にここの席でお伝えしたと思うんです。東京都だけじゃなくて、この手の活動をしている団体だったり活動拠点だったり、その情報をもともと林野庁さんが結構出していたのが今なくなっているんです。なぜか。人手が足りないのか分からないですけどね。多分、集めるのが大変なんです。中島委員とか私もやっていますが、この2人の団体に、「じゃ、お願いします」とか「登録します」とかですけど、こういう団体に「協力してね」という集め方が結構ひねりが要

るんじゃないかと思っただけの質問だったんです。都内にも結構たくさんいらっしゃるんです。どうやって集められるのかなと思っただけです。

【鑑課長】 もちろん広報の仕方というのはあると思うんですけども、あとは、活動していらっしゃる、檜原さんのほうにもそういう組合さんがいらっしゃって、その組合傘下の団体さんが結構こういった活動もされているようですので、そうしたところにお声がけしていこうというふうに思っております。

【鈴木委員】 協力できることがあれば私も紹介させていただきますので。

【鑑課長】 よろしくお願ひします。

【座長】 ほかにご意見はございますか。

【中島委員】 新たな担い手の発掘ということですけども、今、僕が所属している林研グループ等で小学生を対象に林業体験とかやっているんです。小学校は、東京都で見ると公立小学校でも千何百校あると思うんですけど、学校の先生はそれなりに異動されるじゃないですか。そうすると、よかったなと思った体験を、外に行って、「またやりたいんですけど」という話があるんですね。それは非常にありがたくてどんどん受け入れていきたいんですけども、場所と人の問題が一番多くて、平日の昼間に必ず小学校とか公立の学校が森にやってくるとなるので、その課題解決が非常に大事かなと思っただけのところがあります。

その中で、今なるべく絞っているのが、自分の生活圏というか、所属している地域ないし流域の小学校や中学校、高校を重点的にまずはやっていきたいと思っています。それはなぜかという、それがちゃんと同じ地域の話の中で続いて行って、大きくなったときにまたそういったところで仕事をしたいなというのをやりたいと思っています。需要はすごくあって、行きたいという学校も、特に都市部へ行けば行くほどあると思っただけですけども、そこがばあっと来てもてんばらばらみたいになったり。東京だと、例えばうちのほうだと荒川流域の部分であったり、多摩川流域とかもある。多摩川流域の学校がわざわざ荒川流域へ行って話を聞くよりも、ちゃんと目の前を流れている多摩川流域のことを聞いたほうが腑に落ちるかなと思うので、そういった部分でのコーディネートもすごく必要んじゃないのかなと思っています。

林業体験、例えば、「森林環境税でこういうのをやったらいいらしいよ」といって、それが仕事になってしまって、うわあとなる一時的な話ではなくて、ちゃんと何で環境税が必要なのかという部分も考えて、そういった体験をする場とかエリアも考えながら体験

させていったほうがより効率的なのではないかと思っています。その中での山しごと体験も、だからこの場所でやるんだというのを、来た各学校も分かってくるというふうに思っています。

【鑑課長】 確かにおっしゃるとおり、我々行政も、単発的な施策にならないように、各種事業がありますので連携していくところが非常に大事ななど。我々、森林・林業の部隊でも、隣の仕事と実際に連携しているかというところとちょっと疑わしいようなところがあったりして、今年度から結構みんなでその辺を注意していこうねということで進めてはいるんですけれども。しっかりつながっていくように、今日のキーワードはコーディネートかなと思って最初から皆様のご意見を聞いているのですけれども、コーディネーターの重要性、またコーディネートしていく内容、質というものを、行政と実際現場で動かれる方と共通認識を持って進めていくことが重要だと思っています。ぜひまた、委員の皆様もそうですけれども、中島さん、鈴木さんのように現場でやられている方のご意見を本当に参考にしたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

【座長】 どうもありがとうございます。

徳永委員、何かございますか。

【徳永委員】 ちょっと教えていただきたいんですけど、木育アドバイザーというイメージは、民間の方とかを雇用してみたいなイメージで考えていらっしゃるんですか。

【鑑課長】 今はそのように考えておまして、その辺も詰めていかなければならないんですけれども、例えば森林インストラクターの資格を持たれている方は結構東京都は多いんです。そうした方々の活躍の場が実は少ないんだというお話も聞いておりますので、そうした方々と連携することも重要なことというふうに思っています。これは一つの例でございます。

【徳永委員】 ありがとうございます。私も、本当に一つの例ではあるんですけれども、例えば次世代の教育のためという意味で森をどういうふうに提供していくかというところで、民間企業の方の山とかをお借りしたりすると本来の業務に支障があったりするのかなとも思うんですけれども、例えば大学とかだったら逆に平日のほうが都合がよかったりするんで、むしろ国立機関とか教育機関をうまく利用していただくのもいいのかなと思います。一応私は大学に勤めているのでそういうふうに言いますけれども、例えばVRとか林業・森林教育というところも研究テーマの一つとして直接専門を持っている教員とかもおりますし、研究とか教育研究に通ずるものがあればそういったところも可能性はあるのか

など思いました。これは本当に一案なんですけども、コメントまでです。

【鑑課長】 貴重な情報を本当にありがとうございます。

【中島委員】 それにちょっと付随して、例えばなんですけど、東京都内にも農林高校とか昔はあったんですけど、今なかなかそういうのはなくて、学科だけ残っているとかがあつたりするんです。都立高校の中でも東京都と連携して、例えば都有林の活用。以前、農林高校とかが所有していた森とか、演習林で使っていたはずですけども、今は使っていない。逆に言うと放置林になっている。そこをまた再活用して健全な森に直していくとか、そういった生きた教材。我々、実際に現場では放置林を整備しながら健全な森にしていくことをやっているの、そういったのを授業と絡めながら、ここに書いてありますけれども、高校生をターゲットにしていけば、体を動かしたり、子供たちのレジャーというよりはもう少し専門的なところも実際の現場でできる。そういったフィールドが特に多摩地域に結構あると思うので、ぜひそういったのをやっていただけるとありがたいかなと思います。

【座長】 どうもありがとうございます。結構、森林を案内するといっても、いろんな切り口があるから、1回、2回では済まないんですね。植生の話もあるし、木の話もあるし、前回も出たと思うんですけども、今の若い人たちはのこぎりも金づちも使ったことがない。木工体験もないという中で、要するに、なるべく森林に親しんでもらおうと。その親しみ方もいろいろあるんですよということも大事じゃないのかなと思います。

高校生の持っている森林のイメージって、もう全然違うと思うんです。逆の砂漠をイメージする人もいれば、アマゾンの森林をイメージする人もいるし、吉野林業みたいなところをイメージしたり、北海道のヒグマが出るようなところをイメージする人もいたり、いろんなイメージがあるので、まずは森林に入ってもらったらいかなと思うんです。いろいろインターネットで森林の景色を見ることはできるんですけども、実際足を入れていろいろなことを体験してもらうことも大事かなと思うんですね。

そのときに親御さんに言われるのは、いろんな危険生物がいるんじゃないか、何かけがをしたときはどうするんだということで、引率する先生のほうも慎重になってしまったりするので、そういう障害は取り除けばいいと思うんですけども、森林に親しんでもらうことが大事かなと思います。

それから、いろいろな人材育成で、今、自伐林業と自伐型林業というのがあって、自伐林業は自家労働で林業する専業林家さん。自伐型というのは、森林は所有していないです

けれども、地域の森林整備のお手伝いをしましょうということで、Iターンの方とかいろいろ入ってくるので、自伐型林業の方も支援するのが大事かなと思うんです。高校生の就職先の一つにそういうのがありますよとPRしてもらえればと思うんです。職業の選択で、ぜひ魅力ある職業にしてもらえればと思います。

これは、半林半Xとかいろいろやり方があると思うので、その辺も人材を発掘してもらえればと思います。国は、4,000万立方メートルの国産材を出そうと言うのですけれども、そのうちの1,000万立方メートルぐらいは自伐型林業の方でないと。今の林業従事者の数ではとても足りないので、そうやって林業に携わってもらえればと思います。それに、先ほど来出ている安全な職場環境をどう提供するか。これは行政の大事なところだと思いますね。

それから、一般の人は、ハーベスターと言っても何が何だか分かりません。ICTハーベスターと言っても全然イメージできない。それはそうですね。山奥で仕事をしていますので、林業機械のイメージというとチェーンソーぐらいなんです。何を言いたいかというと、ハーベスターを車輪の上、ホイールベースにして、それが公道を走れるように特区みたいにしていただければと思うんです。ヨーロッパは走れますね。ハーベスター、フォワーダーは、車輪のホイールの上に載っていますので、制限速度30キロで走るわけです。別に銀座に出てこいというわけではないので、林業地域のところでね。そういう姿を見ると格好いいなと思います。朝行くのを見て、戻ってくるのを見て、フォワーダーが材木を積んだまま市場へ来るのを見れば、これはやはり憧れると思いますので、林業機械が公道を走れるようにぜひ働きかけていただければと思います。

どうですか、中島委員。

【中島委員】 最近こういう新たな担い手発掘的なところで、幼稚園、小学校、中学校、高校も経験させてもらって、あと社会人、企業の方とかで、昨今のSDGsの話とか地球温暖化の話とかカーボンオフセットの話とかで、排出している会社の方から、「ちょっと案内してもらえないか」という案件をいただくわけです。その中で、実際に木の話的なことで、前にも言ったかもしれないですけど、例えば50年生の木があって、年輪が50個ありますよといったときに、一番最後にできた年輪は外側の年輪なのか内側の年輪なのかという質問。あと、50年生の木を根元で伐りました。年輪が根元では50個当然ありますよね。じゃ、この50年生の木が20メートルありますけれども、10メートルの高さで伐ったときに年輪は何個あるでしょうという質問をしたときに結構いろんな答えが出てくるわけです。

木材を使っている会社の人たちでも「あれ？」という答えとかがあったりするので、根本的に木はこういうふうに大きくなるんだとか、こういう素材なんだというのを分かって木材として使わないと、木のよさを上手に使えていない。料理でも多分そうだと思うんですけど、素材のよさをどう生かすかということも含めこういった体験でやっていくと、新たな発見があってスイッチがまた入ったなというようなことを感じる 때가多々あるので、そういった場がこれから増えていって、それが半林半Xじゃないですけども、林業イコール山の中で木を伐るだけではなくて、そういったことを伝えていって、人と森の関係性が分かるようになっていたり。

あと、森林DXのところでもそうですけれども、結局、そういった環境教育とか、人が入って何かするところはやりやすい環境が一番いいわけです。アクセスがよくて、傾斜が緩くて、しかも伐るのだったらできれば小径木のほうが伐って運びやすかったり。そういうのがこういうデータとかから見えてくると、これは今伐期ではないけれども、そういったところで上手に空間利用しながらできるフィールドだなというのもデジタルデータから読み取れるところがあるので、そういうのが上手に連携して使えていくとよりいいかなと思いました。

**【座長】** どうもありがとうございます。もう少し風呂敷を広げると、林業だけでなく、農業とか畜産とかいろいろ出てくると思うので、それは、私たちが都会に住んでいて見失ってきたものなのかもしれませんけれどね。

**【鈴木委員】** 参考までというか、今、新たな担い手という意味では、未来の担い手として高校生もしくはもっと幼少の年代別の教育だったり普及啓発みたいなところに直結するような支援、施策だと思うんですけども、と同時に、未来のユーザーを育てるとか未来のマーケットを育てることにもつながるんです。さっき座長から、親御さんが心配し過ぎて、ちょっと親の教育も必要だみたいなお話があったかと思うんです。それもあるかもしれないですけども、もっと言えば、もうこの世代だと親が全然森に親和していない、森が遠い存在だというような世代になってしまっていることが多いです。うちのこのイベントは、ちょうど先ほど20周年なんて話をさせていただきましたけれども、20年間やってきて、そのぐらいの年代の人たちがいつの時代も来る中心層なんです。参加者のコアになっているんですけども、その人たちは、森に入ると、木材にも——うちは木材を伐ってしまった跡であること、はげ地であることが多いので間近で見ることはないんですけど、要は、ここの森の木を使ってみたいとかね。森だけじゃなくて材に対しても、一度や二度、

繰り返しリピーターで来ていただく方が圧倒的に多いということもあるのかもしれませんが、けれども、すごく材に対する愛着もすぐに感じてくださるんです。

そういう意味では、若手、新たな担い手、未来の担い手だけじゃなくて、近い将来のユーザーとかマーケットになり得る親を、逆手に取って親子で抱き込むとか巻き込むとかというのがすごく直接的利益、教育をする側、中島林業さんみたいなところも直接的な利益にもつながりやすいんじゃないかと思います。来た瞬間に森へのロイヤリティが上がるといいますか、それは如実に変わりますので、ぜひそういうマーケティングとか行動心理学的な視点も少し入れてこのまま促進していただければと思いました。

【座長】 どうもありがとうございます。

どうぞ、庄司委員。

【庄司委員】 木材会館にも小学校の3年生か4年生を1回連れてきて説明会をするんですけど、そのときに、「これは何の木ですか」とか、そういうのを聞かれるのがまず多い。あと、「世界の中で一番大きい木はどこですか」とか「重い木はどこですか」とか、そういうものも聞かれる。そのときに、ほとんどが日本にはないので、そういうものが東京都にあつたら一番観光の名所になるかなと思います。

例えば、木にロープを結わきました。「10年後、そのロープというか、木はどうなっているんですか？」と質問すると子供たちは全然分からない。「そのまま伸びていくんじゃないですか」とか、そういうのがある。いろんな意味での材木に対する興味というか、教育というか。例えば、「東京都が今、森林面積は何番目なんですか」ということも教えながらやったほうが非常に愛着が湧いてくると思います。

【座長】 どうもありがとうございます。

いろいろ取り組んでおられると思うんですけど、この前モクコレへ行って、去年も行っているんですけど、だんだん充実してきているといいますか、行くと楽しいんです。ただ、場所がビッグサイトで、あそこへは本当に林業関係者しか行かないのもったいないと思うので、どうせやるなら、日比谷公園とか新宿御苑とか、いろんな方が来やすいところがいいかなと思うんです。デパートの屋上でもいいですし、ちょっと場所を考えていただければと。ビッグサイトの悪口を言っているわけじゃなくて、非常にいいですよ、非常に効率よく見るのにはいいんですけども、少し分散して、なるべく高校生、中学生が学校の帰りに立ち寄れるようなところでやってもらいたいなど。

新宿御苑は本当にオアシスですね。あそこへ行くと空気からして違いますので。それか

ら、いろいろな植生もうまく分けられてあるし、非常にいいところですね。そこそこの広さもありますし。そういうところで親しんでもらえればと思います。興味ある人はだんだん八王子とか高尾のほうへ行ってもらえればいいのであって、まず新宿御苑を活用してください。個人的感想ですけれども、親しみやすい、手っ取り早いところですね。木の名前を覚えるのにもいいです。高校生にナラノキとか聞いても分からないし、ヒマラヤスギと普通のスギも分からないし、ヒノキも分からない。本当に高校生の樹木に対する知識はものすごく乏しいので、ぜひ親しんでもらえればと思います。

【鈴木委員】 親はもっと知らないです。

【座長】 親御さんより今の高校生が大事かなと思っていますけれどね。

【鈴木委員】 でも、親御さんはすぐに使ってくれるかもしれませんよ。

【座長】 小中学生相手ですと、やっぱり親御さんに来てもらったほうが話が早いんですね。お子さんに「家へ帰って親に伝えてください」と言っても多分伝わらないと思うので。

【鈴木委員】 案外伝えていますよ。だから、両方。どっちかからどっちかを引っ張ってくる。どっちからでもいけると思います。

【座長】 親子が一番手っ取り早いですがけれど、いろんなやり方があると思うので工夫していただければと思います。

【鑑課長】 ありがとうございます。参考にさせていただきます。

【座長】 いろいろ世の中の動きも変わってきて、ZEHですか、ゼロエネルギーハウスも話題になってきています。それから、断熱性で窓のサッシを木製にしましょうとか動きが出てきています。これにうまく乗っかって若い世代が目覚めていただければと思います。

時間も迫ってきましたけれども、全体を通じて何かご意見がございましたらよろしくお願ひします。

【鈴木委員】 本当に随分しっかりと詰め込んでいただいている、楽しみになってまいりましたので、ぜひこの後も邁進していただきたいと思います。応援しておりますので、お手伝いできることがあれば本気でお手伝いしたいなと思っています。

1点、今後の課題として、材の見える化とか材の融通みたいな話が今日随分出てきていて、最後に4番のサプライチェーンの見える化のところで大分進むんじゃないかと思ひました。しっかりとタイムリーに、欲しいときに欲しいものが欲しいところに行くような礎みたいなのがここでできてくるのだろうと思ひて期待しております。

一方で、労働力の話は、時間軸で未来の担い手みたいところはしっかりとこれから次

年度でこ入れしていくというのは見えるんですけれども、労働力も見える化する。さっき冒頭に、今あるサイトをもうちょっとこ入れしていきますと。林業就業NAV Iみたいなところはもっと積極的にこ入れしていくみたいなお話はあったかと思うんですけれども、今、例えば中島林業さんも、今週は人手が足りないけれども、来週は空いているとか。その辺りの見える化も、近場であればそういう距離の融通みたいなものも実は労働力で必要なんじゃないかな。そこの流動化も必要なんじゃないかと思っていて、それがもし今みたいなプラットフォーム、DX化による見える化ができるのであれば、そっちのほうが抵抗感なく、皆さん本当に喉から手が出るほど、「今月、本当に人がいないんだよ」とか。けがをされたりする現場でもありますので。そうすると、結構、私も大きな森林組合さんから小さい林業家さんまでいろんなところとお付き合いしていますけれども、大きいところでも、あるとき突然人手が足りなくなったりします。そういうときにこういうプラットフォームみたいながあると、もっと敷居が低く、お互いに共創しやすくなるんじゃないかと思いましたので、今後のテーマとしてぜひそんなことも入れていただけるといい。初めが肝腎ですから、一緒にそういうことも考えながらこのプラットフォーム、サプライチェーンの見える化を構築していただきたいと思いました。

【座長】 どうもありがとうございます。

中島委員、何かございますか。

【中島委員】 まさに今、鈴木委員がおっしゃった内容がそうなんですけど、僕とか個人事業主でやられている方が非常に多くて、結局、個人で動いていると、自分で仕事を取ってくるけど、取り過ぎちゃったとか足りな過ぎたとかで、助けに行ったり手伝ってもらったりが多くて、基本、電話とかメールとか、それこそLINEとかいう形で常時やっていることなんです。それを、大きい会社になってくると安定的に雇用してやりながら、誰かが人の手配をやって回していくわけですけど、やっぱり林業の場合は個人事業主が多いので、人の流れというところで、「じゃ、足りないから来て」と言ったときに、ある程度面識ある人とか地域に近い人とかがターゲットになるので、就業NAV Iで電話がかかってきて、「人を紹介するので誰か送り込んでいいですか」といきなり言われても、こちらとしてはちょっと無理かなみたいな感じのミスマッチが非常に起こっています。

就業NAV Iで一緒に一回そういう現場を見て回るとか、どういう林業会社なのかを見て回るとかも一つ必要なのかな。就業NAV Iさんのところにもいろんな人をアテンドする会社さんが関わっていると思うので、「どこどこ県では実績ナンバーワンです。御社も

登録しませんか」みたいな話があるけれども、うちはその地域とちょっと違うから、なかなかうのみにはできないし。もう少しそこら辺がうまく軌道に乗ってくるといいのかなというふうに思います。

【座長】 どうもありがとうございます。

徳永委員、何かございますか。

【徳永委員】 ちょっと戻ってしまうのですが、もしよければ教えてほしいんです。2番目の話の林業機械の導入拡大のところですけども、林道整備、作業道の作設は本当に喫緊の課題かなと思っていて、とてもよいと思うんです。例えば、森林の林業機械がすごく高価だったり、メンテナンスにすごくお金がかかるとか。あと、ここはこのぐらいのパワーが欲しいけれども、ここはそんなに必要ない。だけれども、両方買うにはすごくお金がかかる。そういった機械を共同で使えるような制度とかがあると中小企業の方々はすごくうれしいんじゃないかなと思っています。

というのも、大学でもすごくそこは議論になっていて、これがどのぐらいのメンテナンス費用がかかって、例えば研究費は3年しかついていないけれども、10年間この機械を使いたいとか。そういったところでも行政の支援とかがあれば、もっとすごく作業の効率化とか、中小企業の方が作業を、こういったところでもチャレンジしてみようというところがあったりするのですけれども、今そういう設備への投資とか共同化みたいな動きとか実際にあったりするのでしょうか。

【鑑課長】 林業機械の支援は、リースとかレンタルとか購入については全て支援させていただいているのですけれども、共同という部分では、今そういったところに回っているかというところと回っていないと思います。

ただ、中島委員に聞きたいんですけれども、機械って、私が割と山の人としゃべると、気に入った機械を買いたい、使いたいという方の声大きいのかなと思っているんですけど、人と共同で使うということも結構ありますか。

【中島委員】 あります。場所と、伐出方法が大体同じようにできそうな場所であれば共同で使えると思うんです。僕が思うに、その地域地域で林業経営体があって、ちょっとリーダー的な存在の人とかいるわけじゃないですか。その人の手法が広めやすいと思うんです。だから、その流域に合ったのが勝手にできていけば、そこはそういったやり方の機械で固めていこうかというふうにはなると思うんです。一番簡単なのは、チェーンソーなんかは絶対使うものだから共同で使えるわけですし、絶対にバックホーは道を開設するのにも必

要だったりする。あとは、どういうふうに伐出するか、車両系なのか架線系なのかというところになってくるんじゃないのかなと思うので、共同で一緒に持つことは可能かと思うんです。ただ、誰の機械かという責任の問題と、結局みんな、使いはするけど、メンテナンスはというところになってくるから、それも含めて一緒にできると一番いいかなと思っています。

僕なんか、突発的な話をしてしまうかもしれないですけど、学生さんと一緒に、各流域をモデル地域みたいところで経営計画を立てて、道を造って伐出する。例えば、車両系もそうだし、架線でやってみるというのをモデル的な地域とかできたら非常にいいんじゃないのかなとは思っています。できたらいいなというのが理想ですね。

【座長】 共同所有はありますね。同じような林業をやっている人で、組合をつくれば購入補助も出るということですね。個人には補助金が出ないので、やっているところもある。それから、リースの補助が大事かなと思うんです。林業機械は値段が高いですし、リースの補助ですね。リース会社さんに機械を買ってもらって、利用代は補助するというのであれば、リース会社さんもWin-Winになりますしね。それから、林業大学校とかそういうところで使っていないときは貸し出すということで、研修生、研修した生徒さんに貸せば、とにかく機械は遊ばせないことが大事ですので、そこである程度安く貸して、そのお金でまた次の機械を買うとか、いろいろできるかなと思います。

庄司委員、何かございますか。

【庄司委員】 各分野の専門家の皆様とこうやってお話しできまして、私も非常にお勉強になりましたし、こういう資料がまとまりましたら、非常に素晴らしいものができたと僕もびっくりしています。やはり林業って、植えたから明日すぐ取れるものでもないのに、50年、100年先を見ての計画と色々な企業だと思います。どこかの大統領が明日から紙のストロー廃止とか大統領令に出したこともありますけども、こういうことをこれからもどんどん続けて、懇談会を続けていっていただければ、もっともっとよくなると思いますので、よろしくをお願いします。

【座長】 時間が来ましたので。先ほどの中島委員のにちょっとコメントしたいと思うんです。個人事業主さんの仕事の確保ですね。それで、境界確定するに当たって、山を手放したいという方も結構おられる。東京都ではないですけども、ほかのところで、「手放したいんだ、誰かもらってくれる人いませんか？」と。今、相続もしなければいけないし、その手続が非常に大変で、そこを攻めていきたいということですけども、一日一日だん

だんだん大変になっていくので、何とか効率的なやり方をしていただければと。手放したい方、もう寄附したいという方がおられるので、受皿ですよ。受皿をつくっていただければと思うんです。その受皿があると、いろいろな仕事の確保とかもまたできるのかなと思います。

木を植えた人は、木を売り払った段階で売りたいんですよ。土地を手放したい。そうすると、それを安く買って自社林にして、社有林を増やしていくというビジネスといいですか、そういうことをされる方も出てきました。何を言いたいかということ、林業をやりたい人がまず心配するのは、仕事があるかどうかです。それは、先ほど、仕事の計画があって、仕事のない人にうまく融通するとか、労働力のやり取りをする仕組みも大事なのかなと思います。労働力は絶対的に足りないので、ぜひ仕事を与えるようにして仕組みをつくってもらえればなど。

何を言いたいかということ、林業をやる人が仕事量の不安がないようにすることが大事だと思います。仕事量があれば機械も買えるし、人も雇えるということなので、仕事量の安定化というのは一番大事かと思います。今までは、入札に応じて落札できなかつたら自社林を伐って食いつないだり、そういうことをやっておられたりしていましたので、そういう不安がなくなるようにしていただければと思います。

時間も来ましたので、何かよろしいですか。またあれば事務局のほうへおっしゃっていただければと思います。

そういたしますと、予定されました議事は以上で終了となります。

事務局では今回のご意見を反映して最終的な取りまとめをお願いいたします。

委員の皆様には、進行にご協力をいただきまして、誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

それでは、司会を事務局にお返ししますので、よろしく申し上げます。

《 閉 会 》

【司会】 酒井座長、ありがとうございました。様々な角度から多岐にわたり意見がある中で円滑な議事進行をしていただきまして、誠にありがとうございました。

それでは、閉会に当たりまして、産業労働局次長、安部から一言御礼を申し上げたいと思います。

【安部次長】 産業労働局次長の安部と申します。

委員の皆様におかれましては、今年度この懇談会は3回にわたって開催してまいりました。本当に活発なご議論がいっぱい出るので、私も勉強させていただくことがいっぱいありました。大変意義ある懇談会になっているのかなというふうに考えております。

私どもは、今、東京の林業は伐り時を迎えているというふうに思っておりまして、待たなしの時期にあるんだろうと思っています。そういった意味で今年の予算は結構アグレッシブな施策を組んでいると私どもは考えております。ただ、それを実施していくにもやはりなかなか大変なところも実際あります。そういった意味では、皆様の今日いただいたご意見も参考にしながら、また、その実施に当たっては皆様のご協力をいただきながら、効果的に意味あるものとして進めていきたいと思っています。

今日の意見を聞いていますと、私たちの施策を超えてその先を見ている方もいらっしゃると思います。そこまではなかなか私たちが追いついていませんが、着実に歩みを進めながらキャッチアップできるように進めてまいりたいと思っています。

今日ご説明申し上げました事業につきましては、この後、都議会のほうでご審議いただきまして、予算として成立した後、実施になります。本当に、実施に当たりましては、先ほども申し上げましたけど、皆様の協力をぜひいただきたいと思っております。

最後になりますけれども、皆様には引き続きぜひご協力をお願いいたしまして、簡単ではございますが、閉会の挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

—了—